

『ゆずり葉の精神』

－ 留学生センター紀要最終号に際して －

何ごとにも始まりがあれば終わりがあることは明らかですが、その時その時の刹那を生きている私たちは、悠久な時空の流れの中のひとしづく、今というこの貴重な瞬間の積み重ねをあまり意識せずに生きているように見えます。過ぎ去った記憶は忘却の彼方へ、そして未来はいつも遠い先にあり、今と言う時間が永遠に続くような幻想や錯覚の中で、日々を過ごしているのかもしれない。

留学生センターの歴史も1986年から28年目を迎えました。まさに「光陰矢のごとし」です。この間、外国人留学生指導センターの年報第一号が1993年3月に発刊されてから20年目（途中で本紀要と名前を変えてから15年目）に、機構改革により最終号を迎えることになりました。まず始めに、留学生センターの活動を記憶に留め次につなげる為に、歴代のセンター長名を挙げさせて頂き、一緒に働かれた教職員の皆様に対しましても、多大なるご貢献とご尽力に心から感謝の気持ちを捧げたいと存じます。千田哲資、齋藤寛、有吉敏彦、西田知照、小山純、松村功啓、小路武彦、須齋正幸の各センター長の時代を通じて、留学生センターの活動は着実な歩みを積み重ねてきました。現在、その記録は、長崎大学学術研究成果リポジトリNAOSITEですべてを読むことができます。それぞれの紀要には、留学生支援にかける熱い思いと、国際化対応への苦難の道のりなどを垣間みることができます。大学院入学前の日本語教育、全学教育の一環としての日本語・日本事情教育、そして生活・修学指導に関する研究や、教材作成、ガイドライン策定などが掲載されています。

すなわち、本紀要では、長崎大学の留学生に対する支援事業に関する広範な活動履歴でもあり、単に教育面のみならず、生活全般にわたり、その機能と組織強化への取組みが紹介されて来ました。特に、国立大学法人化に伴い、学長のリーダーシップが発揮される中で、大学の中期計画に沿った教育の国際化機能の集約が図られて来ました。ここ数年にわたる学内の議論を踏まえて、平成25年10月から正式に留学生センターと国際交流課が廃止され、教育の国際化機能を集約する目的で、教職員一体となった国際教育リエゾン

機構が新たに設置され、今までの紀要のあり方も見直されることとなりました。新たな国際教育リエゾン機構は、海外の大学との連携や大学改革により、徹底した国際化を推進し、教育の国際競争力の向上、グローバル人材結育成、留学生の受入促進、キャンパスの国際化などが主たる業務となります。同時に、本学における国際戦略の目標を実現する為の重要な推進拠点となります。まさに、古い殻を脱ぎ捨て、新しいグローバル時代対応に向けて内なる変革が、本紀要にも求められることとなります。

さて、本留学生センターが産声を上げた1986年は、グローバル社会に向けたいくつかの先駆けるような事象が垣間みられています。それは、現代科学技術社会の光と影という一面です。その代表が、世界を震撼させた人類史上最悪のチェルノブイリ原発事故であり、偶然にも現代リスク社会に警鐘を鳴らしたウィリアム・ベックの「危険社会」という本が出版された年でもありました。その後のソ連の解体による東西冷戦構造の崩壊は、グローバリゼーションを一気に加速させ、資本主義を中心とした競争社会へと世界を変容させています。世界の政治経済そして社会の動向は、当然ながら日本へも多大な影響を与えていますが、地方小都市にある長崎大学もその余波を受けないはずがありません。多様な歴史と文化を、そして異なる言語を有する地球市民を、留学生と言う形で受入れる長崎大学でも新たな価値を創造しつつ、社会への責任と使命、すなわち校是である「長崎に根づく伝統的文化を継承しつつ、豊かな心を育み、地球の平和を支える科学を創造することによって、社会の調和的発展に貢献する」大学像を実現しなければなりません。まさに、「知の情報発信拠点」に資する国内外の人材育成です。

留学生センター紀要の最終号に際して、大学の使命である夢と志を実現する為にこそ、新陳代謝の重要性について河井醉茗の詩「ゆずり葉」の一節を以下紹介し、変化の大切さを再認識したいと思います。そして、この「ゆずり葉」の櫛リレーの精神こそが、新しい紀要の脱皮と再生に繋がる有為な人材の育成にもつながり、留学生センターの発展的な後継組織である国際教育リエゾン機構も成果をあげるものと期待されます。

留学生センター紀要20年間の歩みに関与頂いた各位のご支援とご厚情に、重ねまして感謝申し上げます。有難うございました。

子どもたちよ
これは ゆずり葉の木です。
このゆずり葉は
新しい葉が出来ると
入れ代わって
ふるい葉が落ちてしまうのです。

こんな厚い葉
こんな大きい葉でも
新しい葉ができると
無造作に落ちる
新しい葉にいのちをゆずって。

.....
.....
.....

今、お前達は気がつかないけど
ひとりでに いのちは延びる
鳥のようにうたい
花のように笑っている間に
気がつきます。

そしたら子供たちよ
もう一度ゆずり葉の木の下に立って
ゆずり葉を見るときが来るでしょう。

平成26年4月吉日

長崎大学理事（国際・附属研究所担当）
長崎大学副学長（福島復興担当）
長崎大学国際教育リエゾン機構長
山下 俊一